雑談～アリス編～

白黒　朝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雑談～アリス編～

【Ｎコード】
Ｎ３０７６Ｎ

【作者名】
白黒　朝夜

【あらすじ】
魔法と科学が発展してる世界でのお話
高校生活が始まったばかりのエージェは
成績優秀の男の子。
ある日、オトギの国の呪いが渦巻く学校に入ることに！
そこで、チェシャ猫やマッド・ハッターに振り回されて・・・

（※腐向け要素あり。）

？　そしてページはめくられた（前書き）

ドルダム「不思議の国のアリスの本を読んでから見たほうがいいよね、ドルディー」

ドルディー「知ってた方が楽しめるよね、ドルダム」

ドルダム「別に知らなくても困らないけどね、ドルディー」

ドルディー「それもそうだね、ドルダム。」

？　そしてページはめくられた

昔々・・・
おとぎの国に住む住民は考えました。
「死ニタクナイ」　「ズット生キタイ」　「死ヌノハ怖イ」
そして、おとぎの国の住民は黒魔法を使い、
「エイエン」を手に入れました。

そう、エイエンを・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「一年ａ組、エージェ君。　校長先生がお呼びです。校長室に来て下さい。」

教室は静まり返り、下校しようと鞄を持った黒髪の少年を見た。
「いいよな成績優秀なやつは。」
「俺なんか校長室に呼ばれたら停学の話かと思うもん。」
「俺は退学かもな・・・。」
笑い声が響く教室で黒髪の少年、エージェは固まっていた。

「どうした？」

「速くいきなよ。」
「・・・。」
「どうせ、また賞状だろ？」
「・・・た。」
「？」
「今回のテスト、半分以上間違えたかも・・・」
「え・・・。」

彼は成績優秀。学年トップだ。・・・そんな彼が半分以上も間違えるなんて・・・。

「雪が降る。」

誰かがそう呟く声が聞こえた。
外では蝉が鳴いている。　入道雲は優雅に泳いでいる。　水泳部が水に飛び込む・・・

ゆっくりとエージェは立ち上がった。
手が震えているのがはっきりと分る。

隣の席の女の子が心配そうにエージェの顔を覗き込んだ。
エージェの目は少し潤んでいた。

そして、ふらつきながらもエージェは教室を出た。
そして、教室にいた誰もがこう呟いた。

「グッドラック。」

廊下を歩きながらエージェは悩んでいた。

（この前のテストのときは確か風邪を引いていた。
だから、結構間違えたけどまさか呼び出しをくらうほど悪かったなんて・・・・）

そして校長室の前に立つとノックをして、
重く感じるドアを開けた。

「失礼し・・・」
「エージェ君！！」

ビクッとエージェの肩が震えた。

（やばい、めっちゃ怒ってる・・・。）

がしっと、校長がエージェの肩を掴んだ。

「よくやった！」

「・・・はい？」

校長の満面笑みを浮かべた顔が近づく。

「あの・・・何がですか？」
校長がデスクから黒い封筒を取り出した。
「これを見たまえ。」
怖いほどにこにこした校長から封筒を受け取った。
封筒は一度開かれた形跡がある以外何の変哲も無い封筒だった。
エージェは封筒を逆さにした。
手紙が入っていると思ったが、出てきたのはカードだった。

『　　招待状

ルイズ第一魔法高等学校　一年ａ組　エージェ・マンハッタン殿を
フェアリーテール魔法高等学校に招待いたします。
尚（なお）、学費、食費、生活費などは本校がすべて負担します。

フェアリーテール魔法高等学校
校長』

「どうだ？すごい知らせだろう？」
カードを持って動かないエージェの肩を校長が叩く。

「・・・。」

しかし、エージェは動かない。

「おいどうした？」

校長が少し触れた瞬間、エージェは倒れた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ねえ、彼は来るかな？ドルディー。」

「ああ、きっと来るよ、ドルダム。」

沢山のぬいぐるみが置かれた部屋で双子の少年らが
楽しそうに話している。

「みんな、彼が来たら喜ぶよ。ドルディー」

ドルディーと呼ばれた少年が足元のくまのぬいぐるみを拾う。

「でもさぁ、意外とつまらない奴だったらどうしようか。ドルダム」

ドルダムと呼ばれた少年はドルディーのぬいぐるみを指差す。

「分りきったことを聞くなよ、ドルディー。」

ドルディーはニッコリと笑う

「そっか。」

そして、くまのぬいぐるみを引き裂いた。

「キャハハハハハハ・・・」

部屋は甲高い笑い声に包まれた。

つづく

？　そしてページはめくられた（後書き）

やばい！コ●ラのマーチを食べながら書いてたから、
キーボードに食べかすが！！！！

余談はさておき、
読んで下さってありがとうございます！

？　お茶会に遅れるよ（前書き）

エージェ「お腹すいたな・・・」

謎の人物「コ●ラのマーチでも食べるかい？」

エージェ「だ、誰ですか！」

謎の人物「ふふふ・・・」

エージェ「もしや、作者・・・いつか出るとは思ってはいたが、２話で出るとは・・・。」

謎の人物「まあ、コ●ラのマーチでも食べて落ち着こうじゃないか」

？　お茶会に遅れるよ

エージェはフェアリーテール魔法学園の前に来ていた。
フェアリーテール魔法学園といえば、
限られた人のみが入れるという学園である。
そんな場所に昨日、エージェは招待されたのだ。
しかも学費、食費、生活費がすべて免除されるというのだ！
「よかった。　勉強しておいて・・・。」
声にならない喜びがこみ上げる。

「誰だ！」
いきなりの後ろからの大声に驚きエージェは固まった。

「ここは、部外者は立ち入り禁止だぞ。」
「ち・・・違います！ボクは招待されて・・・」

振り向き、エージェはもっと驚いた。

「招待？」

話しかけてきた人物は兎族の２０才ほどの白髪の男性だった。
兎族は珍しいが、そんなことに驚いたのではない。

この兎族の男性は銃を持っているのだ。
いや、その銃をエージェに向けているのだ。

「銃刀法違反・・・あ、いえ。招待状もあります。」
震える手で鞄からカードを取り出す。

「本当のようだな。」
やっと兎族の男性は銃をおろした。

「あ・・・あの・・・なんで、銃を持っているのですか？」
エージェの顔は恐怖に満ちていた。

銃刀法違反という文字が頭の中に浮かんで踊っている。

「ん？何を言っている。この銃で・・・」
兎族の男性が言い終わる前にチャイムが鳴った。

「昼食の時間だな。　俺はH・ラビット。ホワイトって呼んでくれ。」
「・・・はい。」

（「この銃で」の後はなんだよ・・・）
疑問を抱えながらホワイトと門をくぐる。
ところが、校舎に入る直前でホワイトは立ち止まった。

「後は自分で行け。」
「・・・え？」

ホワイトは門の方へと戻ろうと、エージェに背を向ける。
知らない場所で置き去りにされると、思いエージェはあせる。

「職員室の場所ぐらい教えて下さい！」

「知らん。」

沈黙が流れる。
「職員の方じゃなかったんですか？」
「事務員だ。」

校庭のほうからはしゃぎ声が聞こえる。

「なんで、事務員なのに知らないんですか？」
ホワイトはこの質問には答えずイライラした声で、
「職員室ぐらい中に入れば分るんじゃないのか。」
と、吐き捨てた。

ホワイトは何度も門のところを気にしていた。
待ち合わせ場所に誰かが来るのを気にするように・・・

「誰かを待ってるのですか？」

ホワイトは無表情でこう言った。

「アリスが追いかけてくれるのを待っているんだ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フェアリーテール魔法学園、
数学教師の兎族のマーチ・ラビットは、食後の散歩をしていた。
「お、お、おむらいす～♪きいろい～おむらいす～♪」
昼食はオムライスだったらしい。

「あれれぇ～誰かがうろうろしてるよぉ～」
校舎の前に行くと黒髪の少年がうろうろしていた。

「あれれぇ～？君は迷子かなぁ？」
笑顔で少年、エージェに近寄る。

いきなり出てきた茶髪でロン毛の兎族にエージェは驚いたが、すぐに冷静さを取り戻した。

「違います、招待されたんです。」
エージェはやっとこれで職員室に入れると思った。
しかし、マーチはポケットから飴玉を取り出した。
「これあげるから、ママのところに帰ろうねぇ～♪」
「なめてるのか！」と、思いながらもエージェはカードを見せ付けた。
「ボクは高校生です！この学校に転校することになってるんです！」

「あ～そうなんだぁ～じゃあ職員室に行くところかなぁ～」
マーチはアメをポケットにしまうとエージェの手を取った。

「ボクが案内するよぉ～♪」
エージェは強引に引っ張られてよろけた。

「あ、ボクはねぇ～算数の先生のねぇ～マーチ・ラビットていうのぉ～」
「・・・数学ですよね。」

兎族とは変人が多い。エージェは思った。
「気軽にぃ～マーチ先生って呼んでいいよぉ～」
「は・・・はい。」

マーチは校庭に向かって走り出した。
「ちょっ！校舎はこっちですよ！」
「あ、そっかぁ～」

エージェは一気に不安になった。
（本当に教師なのか？）

「よし、つ～いた。」
「ありがとうござ・・・」

ドアのところには『音楽室』と、書いていた。
「え！ここ・・・」
気がつくとマーチは消えていた。

「何だったんだ。あの教師・・・。」

＊＊＊＊２０分後＊＊＊＊

「なんなんだこの学校！」
エージェの目には涙が浮かんでいた。

「職員室はどこだー！」
ここの生徒に聞くと「上」だとか「下」だとか「小鳥さんが教えてくれる」だとか
とにかく滅茶苦茶な返事ばかりが返ってきた。

「もうやだ。帰りたい・・・。」
と、下を向くと何かが落ちていた。

「何だこれ？」
近くで見ると、飴玉だと分った。

「まさか・・・。」
よくみればところどころに飴玉が落ちている。

「ヘンゼルとグレーテル・・・」
昔、読んだ絵本によく似た話があった。　置き去りにされる兄妹の話だ。
飴玉を頼りに歩いてみると何も書いてない古びたドアにたどり着いた。
「失礼しまーす・・・」
もしやと思い開けると・・・そこは職員室だった。
「あれれぇ～君はさっきの迷子ちゃんだぁ～」
聞いたことのある声が耳に届いた。
「マーチ先生・・・」
そこにはペロペロキャンディをくわえたマーチがいた。
「食べるぅ～？」
マーチが差し出す飴をエージェは押し返す。
「なんで、職員室に連れって行ってくれなかったんですか！」
「あれれぇ～連れて行ったと思ったんだけどなぁ～」
「その喋り方、どうにかしてください！」
「クスッ」
隣で笑い声がした。
「え？」
振り向くとシルクハットをかぶった灰色の髪をした男性がいた。

「すみませんね、マーチ君は方向音痴なんですよ。」
「・・・あ、いえ。」
顔も整っている綺麗な人に話しかけられてエージェはあせった。
「私は国語の教師のマッド・ハッターです。ハッターと呼んでくださいね。」
「ボクはエージェ・マンハッタンです。ここの学校から招待状が来て・・・」
エージェは鞄からカードを取り出そうとしたがいきなりマーチにほっぺをつねられた。
「こらぁ！女の子がボクって言ったらダメだよぉ～」
ハッターは首をかしげた。
「おかしいですね、転校生のエージェ君は男の子と聞いていましたが・・・。」
エージェが固まる。
「・・・・です。」
エージェが小声で何か呟いた。
「？」
「？」
「ボクは、・・・男です！」
泣きながらエージェは叫んだ。
「あれれぇ～びっくりだねぇ～」

「男の子だったんですか。」

「驚いてるようには聞こえないのですが・・・」

ハッターが机から一枚の紙を取り出す。

「これは、時間表です。この学校は時間に厳しいので気をつけてください。」

「はい。」

「あとねぇ～全員、寮生活だから歯ブラシとか持ってきてねぇ～必要なものはほとんど揃ってるはずだけど、ぬいぐるみとかは無いから注意してねぇ～」

「はぁ・・・」

「あ、君は私のクラスの生徒ですよ。１－Ｋになります。」

微笑むハッター。

「Ｋって、そんなにクラスがあるんですか？」

「いえ、ＱクラスとＪクラスとＫクラスの３クラスです。」

微笑むハッター。　苦笑のエージェ。

「しかし、本当に女の子みたいに可愛らしいですね。」

「そうそう、襲われないように気を付けてねぇ～」

「・・・襲われる？」

微笑むハッター、笑うマーチ、疑問に思うエージェ。

「この学校のほとんどの男子生徒や男の先生はなぜかそっち系なんですよ。」

「み～んな女の子には興味ないんだよねぇ～」

「え・・・ほとんどって・・・・。」
微笑むハッター。　微笑むマーチ。　とりあえず距離をおくエージェ。

「大丈夫だよぉ～ボクはハッターとは違ってお付き合いから始める派だからぁ～」
「そういう意味じゃ・・・それに『ハッターとは違って』って、どういうことですか・・・」

「まあ、仲良くしましょう、エージェ君。」
「嫌です！！」

エージェの苦悩は　つづく

？　お茶会に遅れるよ（後書き）

最近、プリン味のコ●ラのマーチ見てないなー

あ、この文章を見てるってことは、全部読んでくださったんですね！

ありがとうございます！！

感想を書いていただけると光栄です。

？　さあ、迷子にならないように気をつけて（前書き）

マーチ「あれれぇ～エージェ君って、デル君と同じクラスだねぇ～」

エージェ「デル君って？」

マーチ「会えばわかるよぉ～変わった子だもん～」

エージェ「変わった人はもういいです。」

？　さあ、迷子にならないように気をつけて

正式に転向した日から次の日。

「では、君の部屋は１３号室になります。チェシャ君と同室です。」
ハッター先生が部屋の合鍵を渡す。

俺、エージェは今日から新しい高校生活が始まった。

「チェシャ君は2年生です。風紀委員長もやっているんですよ。」
「・・・2年生でも委員長が出来るのですか？」
「ええ。年齢は関係ないのですよ。」

変な学校とは思ってたが・・・。いや、そんな高校なんて沢山あるかもしれない。

「そうだ、私の部屋の合鍵を渡しますね。」
ハッター先生の部屋の合鍵を受け取る。
合鍵には帽子方のキーホルダーが付いている。ん？なぜ先生の部屋の鍵・・・？

でもなんで先生の部屋の鍵を？
「寂しくなったらいつでも来て下さい。いっしょに寝てあげますから。」

「お返しします。」
合鍵を押し返す。　残念そうに受け取るハッター先生。

死んでも行くか。

「では、荷物を置いたら8時から授業があるので、遅刻をしないようにしてください。」
はい。

ハッター先生が帰った後、鍵を開けようとドアノブに手をかけた。

カチャ

鍵はかかっていなかった。
「お邪魔します・・・。」

ドアを開けると中にはチェシャさんと思われる薄い紫の髪をした猫族の人がいた。

「あの、今日から同室になるエージェです。」
「ミー。」
「・・・・え。」
何なんだよ、「ミー」って。　言葉が通じてないのか？

「あの・・・荷物、置いてもいいですか？」
「ミー。」
良いのか、悪いのか分らねぇよ！

とりあえず、荷物を置く。
「ミーミミー、ミー。」
「え？」
何か聞かれたらしい・・・のか？

「えっと・・・。」

「ミーミー、ミー」

分るか！　「ミ」以外で話せよ！

チャイムが鳴った。　よし、逃げられる。

「あの、ボク、授業があるんで。」

部屋を急いで出る。　何なんだ、あの先輩は・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

授業には何とかギリギリで間に合った。

もう、ハッター先生は来ていた。

「みんな、彼はエージェ・マンハッタン君。新しいお友達です。」

みんなから拍手が贈られた。　何か恥ずかしいな・・・。

「じゃあ、出席をとります。エージェ君が名前を覚えやすいように、なるべく大きな声でお願いします。」

『はーい』という返事が教室内に響く。　クラスの奴はまともらしいな。

「こっちだよ」

黒髪の男子が前の席を指差す。　俺の席はなぜか先生の真前・・・。
「ありがとう」
優等生スマイルでお礼を言う。しかし、白い肌の人だな。　まるで、雪の様だ。

「じゃあ、出席をとりますよ、　バット・ウルフ君。」
「はーい」
やる気の無い声が俺の横で聞こえた。
狼族だ。顔に火傷の跡がある。・・・しかし、変わった名前だな。
直訳すると、「悪い狼」だ。　ニックネームなのか？

「シンデレラ君」
「はい。」
可愛らしい声が後ろのほうで聞こえた。
振り向くと茶髪の可愛らしい男子だった。　ちょっと残念だ。
しかし、「シンデレラ」って、変な名前だな・・・それともニックネームなのか？

クラスの中を見渡すと、全員男子だった。
そういえば、校舎内をさ迷ったとき、女子には会ってない気が・・・

「白雪姫君。」
「はい。」
さっき、席を教えてくれた奴だ。・・・どっかで聞いたことのある名前だな。
う～ん、思い出せない。

「ヘンゼル君」
「はーい。」
これも聞いたことがある名前だ・・・ん？もしや、ヘンゼルがいる

という事は・・・

「グレーテル君」

「はーい。」

よっしゃ！　ビンゴだ！・・・って、なんで分ったんだろう。

何か、規則性があるような気が・・・

「アラジン君」

「はい。」

あ、もしかして・・・

「御伽噺（おとぎばなし）！！」

静まり返る教室・・・

「エージェ君、静かにしようね。」

ハッター先生が俺の頭を優しく叩く。

「すみません・・・」

笑い声も聞こえる。　最悪だ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

生徒会室と書かれた部屋で双子の少年らが楽しそうに笑っていた。

「聞いた？御伽噺って言ってたよ、ドルディー。」
「聞いたよ。彼、面白いね、ドルダム。」
「でも、間違っては無いよね、ドルディー。」
「ああ、いいところまで来たよね、ドルダム。」

「次はデルに会わせないとね、ドルディー。」
「彼、きっと喜ぶよ、ドルダム。」

ドルダムは壁に掛かっている電話機を取った。
「もしもしー、ハッター？エージェ君に会いたいんだ♪　え？授業中なの？
じゃあ、昼休みに来るように言ってよ。じゃあね、バイバイ。」

受話器を置くドルダム。
「昼休みまで待てないよ、ドルダム。」
「じゃあ、ホワイトに頼んで時計を進めてもらおうよ、ドルディー。」

ドルダムはドルディーに電話を渡した。
「もしもしー、ホワイト？　あのね、校舎中の時計を・・・」

そして、五分後。校舎内に銃声が響いた。

つづく

？　さあ、迷子にならないように気をつけて（後書き）

うわあー！コ●ラのマーチが無くなった！！
誰だ！食べたのは！！
・・・え？自分で食べた？
そうだったけ？

余談はさておき、
見ていただきありがとうございます！

？　時計と兎と銃（前書き）

エージェ「今、銃声が聞こえましたよね？！」

ハッター「いつものことだから気にしなくていいですよ。」

エージェ「もしかして、事件ですか！！」

ハッター「だから、いつものことなので無視しててください。」

エージェ「・・・はい。」

？　時計と兎と銃

青空が広がる午前１１時。
校内はとても静かだった。

その中で一人、エージェは悩んでいた。
（おかしい。銃声が聞こえたのに誰一人気にかけない。
しかも、そのまま授業を続けるなんて・・・おかしすぎる。）

エージェは時計を見る。
さっきまで１１時を指していた時計が今では１１時２０分を指している。

（時計もおかしい。
まだ、一時間目も終わってないのにもう、１１時過ぎた。）

エージェは悩んでいた。
この教室の中にピリピリとした空気がずっと流れている。

狂気　殺意　恨み　妬み

そんなものが、この空間に漂っている。
悩んでいると、チャイムが学園内に鳴り響いた。

「はい、次は昼食の時間ですね。　五時間目は数学なので、
応用クラスはＫクラスに、標準クラスはＱクラスに、
基礎クラスはＪクラスに移動ですよ。」

「はーい。」

教室内に笑い声が響く。
「エージェ君。」
後ろから呼び止められた。ハッター先生だ。
「今から、デル君と生徒会室に行って下さい。」
少しあせっている様な話し方だ。
「デル君って？」
エージェはまだ、クラスの人の名前と顔を覚えていない。
「一番右の列の一番後ろの子です。生徒会室はデル君が知っています。」
そう言うと、ハッターはどこかに行ってしまった。
「何、急いでるんだろう・・・」
エージェはデルの席のほうを見た。
白い髪の男子と一瞬目が合ったが、すぐにそらされた。
「あの、デル君だよね？」
話しかけてみる。
「あ、ああ。」
返事はしてくれたものの、目を合わせようとはしない。
「先生が一緒に生徒会室に行くように言われたんだけど・・・」
デルの目は綺麗な赤い目で、右目は眼帯をしていた。
「そ、そうか。」
エージェが顔を覗き込もうとするたびに目をそらされる。
「じゃあ、行くか。」
目を合わせようとしないまま、逃げるようにデルは席を立った。

「ああ。」
エージェも追いかけるように教室を出た。
無言で廊下を歩き続ける。
「あのさ、」
デルを呼び止める。　デルのかたがびくっと震えるのが見えた。
「なんか、悪いことした？嫌なことをしたなら謝るけど・・・」
デルの歩くスピードが遅くなる。
「いや、俺が悪いんだ。」
「・・・なにが？」
デルはこの質問には答えずに無言で歩くスピードを速めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

職員室でハッターは怒っていた。
「ホワイト！授業が出来なかったじゃないですか！！」
時計が進んでいることにはとっくに気づいていた。
「おかげで、お腹もすいていないのにお昼ご飯を食べるんだよぉ～」
マーチが隣でロリポップを舐めながら呟く。
この学園で時計の鍵を持っているのはホワイトだけ。ってことは犯人はホワイトしかいない。
「双子（トゥイードル）の仕業だ。」
ホワイトが呟く。

「ってことは、あの子がアリスなの？」
・・・下から声がした。
見下ろすと理科の教師のヤマネがいた。
「アリスではない・・・。」
ホワイトが表情を曇らせる。
「じゃあ、あの子は誰ぇ～？」
ハッターがマーチの頭を撫でる。
「亀の味噌汁だね。」
ヤマネが呟く。
「神のみぞ知る、って言いたいのですか？」
緊張した空気が消えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

デルが歪んだドアの前で止まる。
「ここだ。」
プレートには文字が書いてあるが読めない。
「なんて書いてるんだ？」

見たことのあるような文字だが、読めない。
「それは、鏡文字で生徒会室と書いてある。」
デルが囁く。

確かに鏡文字で書いてある。
「なんで、鏡文字？」

よく見ればドアの『押す』と、書いてあるところも鏡文字だ。
「鏡の国だからな。」

デルが呟く。
「？」
「後で、わかる事だ。」

デルがドアを押す。　ゆっくりとドアが開いた。

「失礼します。」
エージェも続いて入る。
中は電気がついていなくて、薄暗かった。

もきゅ・・・
何かふわふわしたものを踏んでよろけた。
「・・・？」

足元を見るとくまのぬいぐるみがあった。
「足元に気をつけろよ。」

デルがよろけたエージェを支える。
「あ、ありがとう。」

カチッ　という音がして電気が付いた。

「ばあ！！」

「うわっ！」

いきなり目の前に人の顔が出てきて、エージェは驚いた。

「ビックリしたかな？ドルディー。」

「すごく驚いてるよ、ドルダム。」

デルが腰を抜かしたエージェを抱き起こす。

「こいつらが、生徒会長のトゥイードルだ。」

デルが双子を指差す。

エージェの目には同じ顔が二つ映っていた。

そして、エージェは気絶した。

んだってさ

つづく・・・・

？　時計と兎と銃（後書き）

眉毛のコアラ出無いな・・・

読んでくださりありがとうございます！

まだまだ続くので読んで下されば光栄です！！

？　イカレタ話（前書き）

マーチ「あれれ～？エージェ君が見当たらないよぉ～」

ハッター「・・・チッ」

マーチ「ハッター？・・・キャラが違うよぉ・・・」

ハッター「豆腐の角に頭ぶつけて氏ね！！」

マーチ「ハッタアアアアあああ！！！！！！」

？　イカレタ話

う・・・
気絶してたのか・・・？
確か、生徒会室に入って、
くまを踏んで、
顔が二つ・・・
・・・
落ち着け俺。

『おい！こいつに何をした！！』
『何もしてないよ。ねえ、ドルディー』
『ちょっと、驚かしただけだよ。ねえ、ドルダム』

声が聞こえる。
そろそろ起きたほうがいいのか？

目を開く。
同じ顔が二つ・・・

「○×♪☆$！」
声にならない叫びがこみ上げた。

「よかった！生きてたのか！！」
誰かに強く抱きしめられた。
あ、デル君だ。

ふふふ、ようやく、目を合わせたな。顔を見せろ！！
・・・ん？どっかで見たことがあるような目だな。

「・・・。」
あ、目をまた逸らしやがった。

「いつまで抱きついてるの？」
「僕らの紹介ぐらいさせなよ。」

あ、ごめんなさい。
てか、双子だったのか。だから、同じ顔なのか。

「右の白いニット帽がドルディー。左の黒いニット帽がドルダム。」
デル君が丁寧に説明する。

二人とも茶髪で、顔はいわゆるイケ面だ。　身長も高いし、モデルみたいだなー。
子供っぽい話方さえなければ、モテモテだろうな。

「ねえ、さっそく本題に入るけど、いい？」
・・・どうぞ。
「驚かないで聞いてね。」
はい。

「僕らは、１３９才なんだ。」
へー・・・えええええええええええ！！！

「そこまで、驚かなくても」
じょ、冗談ですよね・・・
「ハッター、マーチ、チェシャ、ホワイトはもっと年上だよね。」
何歳だよ・・・
「えっと、１８６５年生まれだから・・・」
もういいです。

「落ち着いて、今から僕らが話すことを聞いてね。」
努力します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昔々、御伽の国という御伽話の住民が住む国がありました。

ある日、外の世界から悪魔がやって来ました。
悪魔は言いました。

「永遠ノ命ガ欲シクナイカ？」

住民はエイエンを欲しがりました。
誰だって、死ぬのは怖いのです。

そして、悪魔と契約をしてエイエンを貰いました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「その、住民が先生や、生徒だってこと。」
なるほど、だから白雪姫や、ヘンゼルとグレーテルがいたのか。
「わかった？」
面白いジョークですね。
「・・・。」
だって、信じがたい話じゃないですか。
「この話には続きがあるんだよ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

しかし、エイエンとは絶対に死なないというものではなかったのです。

『死ンデモ、生マレ変ワレル』
というものでした。

それを知った住民は激怒し、悪魔を問い詰めようとしましたが、それは出来ませんでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

生まれ変わるって、どういうことですか？

「次に生まれ変わったときに、前世の記憶があるってこと。」
それだけですか・・・。
「うん。」
結果的には記憶がずっとある。といったところか。
なんで、追いかけて魔法を解いて貰わなかったんですか？
「契約で、御伽の国から出られないわけ。」
ややこしい契約ですね。

「でも、全員が同じ契約じゃないんだよ。」
ん？またややこしいぞ。
「中には身長が永遠に伸びないとか、１６歳以上になれないとか。」
地味な嫌がらせみたいですね・・・

「でも、ほとんどが御伽の国からでられないって、契約したらしいよ。」
たぶん、適当に決めたんだろうな・・・

「で、元御伽の国がこの学園の敷地内。」
てことは、学校からほとんどの人が出られない。

「で、こっからが、大きな問題なわけ。」
永遠に生きてるのに、不満でもあるんですか？
「死ねないんだよ。」
死ななくていいじゃないですか。
「１００年以上も生きてたらつらいことも沢山あるわけジャン。」
まあ、そうですね。
「いっそ、死にたい！と思っても死ねない。これはかなりきついんだよ。」
うーん、１５年しか生きてないから解りません。

「で、ここで神様が助けてくれるわけ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

哀れに思った天使様が魔法を解く条件を出してくださいました。

その条件とは、

『ハッピーエンドで話を終わらせること』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

？

「つまり、僕らの場合アリスが夢から覚めること。」

「シンデレラの場合、王子が見つけ出すこと。」

簡単な話じゃないですか。

「いや、この条件は不可能だよ。」

「問題が起きたんだ。」

え？

「アリスが行方不明。」

「すべての王子が失踪。」

「ピーターパンが飛べなくなる。」

「三匹の子豚が家を作らない。」

・・・大変ですね。

「だから、天使様を見つけて条件を変えてもらわないといけないんだ。」

悪魔を見つけて魔法を解いてもらえばいいじゃないですか。
「見つけて問い詰めたけど、」
「魔法の解き方を知らないんだって。」
そうきたか・・・

「だから、早く条件を変えてよ。」
は？それは天使様に言ってください。
「何言ってんの？」

「君が天使様なんだよ。」

続く・・・のか。

？　イカレタ話（後書き）

最近知ったこと。
眉毛コアラの眉毛は、

眉毛ではなく、シワだ。
・・・。

余談はさておき、
読んで下さりありがとうございます！！

？　女王様は赤が好き（前書き）

エージェ「疲れた。何んなんだあの双子。」

白雪姫「あ、エージェ君。お帰りなさい。」

エージェ「ただいま。あれ？廊下が騒がしいね。」

白雪姫「遅刻した生徒を処刑してるの。」

エージェ「そっか。・・・ええ！！」

？　女王様は赤が好き

狂ってる。

遅刻したら処刑されるなんて、
生まれ変われるとはいえ、残虐すぎる！
俺、エージェは廊下に向かう。

「おい！」
通りすがりのデルに腕を掴まれる。
「廊下は今、危険だ。」
そんなの知ってる。
「今、廊下に出たら死ぬぞ！」
でも、止めなきゃ！
「お前は死んだら生まれ変われないんだぞ！」
でも・・・
「やっとお前を見つけたのに・・・死なれてたまるか！！」
天使のことは、関係ないだろ！大体俺は天使じゃない！
「だが・・・」
それに、こんなことで死んでたまるかよ！
「エージェ・・・。」

ゆっりとデルが手を離す。

「俺も、ついていくからな。」
俺は廊下に向かって走り出す。
もう、人が死ぬのは嫌だ！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ざわざわ・・・

処刑される人はわき役。
処刑理由は遅刻。

目立たない人だし、死んでも気づかないだろう。

誰も止めようとはしない。
いや、むしろ楽しみにしているようだ。

「ちょっと！通してよ！」
エージェが人ごみを押しのけながら進んでいく。
「こんなの、間違ってる！中止させてよ！」
誰一人エージェの言葉に耳を傾けない。

何で、こいつは他人のことに首をつっこみたがるのだろう。
俺、デルは思う。

「あ、処刑人が来たぞ！」
緑髪の青年がわき役の方へ近づく。見た目は高２ぐらいか。
長い横髪を左側だけ、三つ編みにしている。そして右手には大きな槍が握られていた。

あれは、トランプの兵隊の、クラブのＡだ。通称クラブ。
処刑人はトランプの兵隊のＡだけがなれる職業だ。

エージェに教える。
「じゃあ、あいつを止めればいいのか。」

早速、クラブに近づこうとするエージェ。

まて！Aはトランプの兵隊の中で最も強い存在だ。
しかも、クラブは一番性格が悪い。お前がかなう相手じゃない！

「でも、このままじゃ・・・」
相手は緑魔法使いだ。
赤魔法なら勝てる。
「俺、白魔法使いなんだけど・・・」

だから、あきらめろ。
「そんなことできるか！！」

クラブが槍をわき役に向ける。

「もう、間に合わない！」
エージェが人ごみから飛び出す。
待て！

手を伸ばすが、届かなかった。
嘘だろ・・・

わき役をかばったエージェの肩に槍が刺さった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・・・
俺、エージェは驚いていた。
目の前にいるクラブって奴も驚いている。

痛い。

激しい痛みが左の肩を襲う。
クラブが槍を俺の肩から引き抜いた。
痛い。
意識が朦朧として、立つことも出来ない。
デルが駆け寄って来て俺を強く抱きしめる。
この感じ・・・昔どこかで・・・
「ちっ」
クラブが舌打ちをするのが聞こえた。
「邪魔をするならお前らも死刑だ。」
槍を俺とデルの方に向ける。
やばい、逃げなきゃ・・・
足も手も動かない。このままじゃ・・・
デルから黒いオーラが漂う。赤い目がクラブを睨みつける。
デル？逃げないと・・・
クラブの足元から無数の黒い手が出てきた。
え？黒魔法！？
「な・・・」
逃げようとしたクラブの足を黒い手が掴む。
そして、黒い手がクラブの首を強く絞めた。
「う・・・あ・・・」

クラブの苦しそうな声が廊下に響く。

やめろ！死ぬぞ！！

デルの目はいつもより赤く染まっていた。

やめろと言いたいのに口から出るのは弱弱しい声だった。

ダメだ・・・意識が遠く・・・

そして俺の視界は途絶えた。

・・・から。

続く・

？　女王様は赤が好き（後書き）

まさか！６話目で主人公が死ぬのか！！
って気絶しただけだよな・・・。

呼んでくださりありがとうございます！

？　悪魔と狼とトランプ（前書き）

狼さん「暇だなー」

デル「おい！闇医者！」

狼さん「誰が闇医者だ！って、デルじゃねえか。」

デル「こいつを診てくれ！」

狼さん「って、急患かよ。」

？　悪魔と狼とトランプ

う・・・ん・・・

目が覚める。

ここは？ベッドの上？

「お、起きたか。」

灰色のぼさぼさの髪をした狼族の男性が近寄る。

ここは？

「保健室。しかし、さすが天使だな。あの大怪我がもう治った。」

怪我？そうだ。クラブを止めようと・・・

デルは！？クラブは！？

「落ち着け。デルは魔力の使いすぎで、お前を運んできてすぐに倒れたから隣のベッドで寝てるよ。」

カーテンの奥から寝息が聞こえる。良かった、無事か。

そういえば、肩が痛くない・・・

服に穴は開いてはいるが、傷跡は見当たらない。

「そんでもって、クラブは仕事を終えて自分の部屋に帰った。」

仕事・・・

結局止められなかったのか。

「俺の自己紹介をしてなかったな。俺は狼。赤頭巾に出て来る。」

あ、あの狼ですか。
「狼って沢山でてくるから名前がややこしいんだよな。」
それもそうですね。
「だから、自分で名前をつけるわけ。俺はライって付けたんだ。」
いい名前ですね。

「そういえば、お前って女みたいな体してんだな。」
体・・・！？な、何をしたんですか！！
「いや、上着を脱がして傷を診ただけだよ。」
・・・そうですよね。ごめんなさい。
「でも、そういう可愛い子が俺の好みなんだよな。」
え？何を言い出すんですか？
「そう、怖がらなくてもいいだろ。俺は優しいほうだから。」
く、来るなあああ！！

ごすっ！

「この、変態教師め！」
あ、デル。
「・・・花瓶で殴るなよ。凶器だぞ、花瓶は。」
「後悔はしてない。」
デルが来てくれて助かったよ。
「もう、怪我のほうは大丈夫なのか？」
うん。治った。
「ならいい。」

「デル・・・もしかしてこの前のこと怒ってんのか？」
「な、何を言い出すんだ！！」
何かあった？
「俺がこいつをベッドに・・・」

「子供の前で何を言ってるんだ！！」
何があったんだよ？
「あのな、俺がこいつの・・・」
「言うなあああ！！」
・・・。聞かないでおこう。

ガラッ

「あ、ダイヤじゃないか。どうした？」
金髪を後ろで一つで結んだ髪型をした１８歳ぐらいの人が入ってきた。

ん？ダイヤってことは、トランプの兵隊・・・
「いやークラブが珍しく怪我したやろ。誰が怪我さしたんかなって思ってきたんよ。」
独特な話し方だな・・・。

「俺だ。」
デルが前に出る。
「あんさんか。おや？あんさんは確か・・・」
「ケンカなら外でやるが、どうする？」
火花が飛散る。

ま、待ってください！クラブさんを怪我さしたのは俺のせいで・・・
「エージェは関係ない！」
しゅん・・・
「まあ、落ち着きーや。タイマンしたくて探しにきたとちゃう。わいの興味範囲や。」
なら、よかった。
「あんさんはこれまた女々しいんやな。お肌もすべすべやんけ。」

ダイヤさんが俺の頬を触る。
「エージェに触るな！」
デルがダイヤを睨みつける。
「はは、じゃあ、わいはここらで去りますわ。しっかし面白いな。」
「何がだ！」
「悪魔と天使が仲良しって、ことがや。」
ダイヤが出て行った。・・・悪魔って？

「あれ？デル、この子に教えてないのかよ。」
「・・・。」
もしかして、デルが悪魔・・・？
「・・・。」
デル？何で言わなかったんだよ。別にいまさら驚かないって。
「・・・も。」
？
「何も、覚えてないのか？」
何が？
「・・・ならいい。」

何なんだよ・・・

続く・・・です。

？　悪魔と狼とトランプ（後書き）

コ●ラのマーチを食べてるといろんなアイディアが浮かぶなー。

あ、御伽噺のキャラクターで出して欲しい人がいたら、

感想で教えて下さい♪

出しますよ☆

？　パーティーが始まるよ（前書き）

エージェ「覚えてないのかって、どういう意味だろう・・・。」

ヤマネ「ふぎゅぅ・・・」

エージェ「うわ！今、何か踏んだ！？」

ヤマネ「痛い・・・のですよ・・・」

エージェ「ごめんなさい！まさか人が床で寝てるなんて・・・」

ヤマネ「・・・。」

エージェ「本当にごめんなさい・・・」

ヤマネ「まあ・・・気にしないでよ・・・。」

？　パーティーが始まるよ

夏。

人魚が水に飛び込み、
小人は木陰でくつろぎ、
チェシャ猫は道端で干からびる・・・

って、チェシャ先輩いいい！！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・君。」
う・・・ん・・・

「エージェ君！」
ん・・・って、白雪さん！

俺、エージェが目を開くと白雪姫の顔が近くにあった。

「授業中だよ。」
あ、寝てたんだ・・・。

ハッター先生は気づいてはいない。
よかった。ありがとう、白雪さん。

「それより、何の夢を見てたの？かなりうなされてたけど・・・」
・・・先輩が干からびる夢。

「うふふ。面白い夢ね。」

白雪さん。

「ん？なあに？」

口調が女性になってます。

「あ、本当ね・・・じゃなかった。本当だね。」

白雪さんは、今、男の子に生まれ変わってるんですから、

女性の話し方だと、オカマみたいに聞こえますよ。

「そうだよね。腐部の部長として、もっと気を付けないとダメだね。」

腐部？そんな部活があるんですか？

「うん。素敵な♂×♂のカップリングを研究する部活なんだよ。」

俺には永遠に関係の無い部活ですね。

「そうでもないよ。今、エージェ君×デル君のカップリングが・・・」

授業中ですよ。

「もう、ツンデレなんだから・・・」

口調が・・・まあ、いっか。

「エージェ君。」

は、はい。何ですか？ハッター先生。別に、寝てはいませんでしたよ。

「メイド服を着る気はありませんか？」

ありません。（即答）

「よし、プールに行きましょう！」
・・・はあ！？

『やったーー！！』
クラスのみんなが、喜びの声をあげる。
メイド服って、なんだったんだろう・・・。

でも、水着なんて持ってませんよ。
「保健室に沢山あるので大丈夫です。」
保健室って、一体・・・。

「では、男子はＪクラス、女子はＱクラス、元男子はＫクラス、元女子は保健室で着替えてください。」

「じゃあ、また後でね。」
手を振る白雪さん。白雪さんは元女子か。

およそ、１／４が残った。
「じゃあ、水着はここに置いておきますね。」

ぐいっ！

デ、デル！何だよ、腕を掴まなくても・・・
「急げ！早く水着を取らないと・・・」
急がなくても、大丈夫だろ。
「いや、ハッターのことだ。たぶん半分は女子用のスク水だ。」
いそげええええ！！

教卓の前にあるダンボールを急いで覗く。

よかった。まだ普通の水着が残っていた。
デルと水着を取って、自分の席に戻る。
次からは気を付けないとな。

ネクタイを外して、上着のボタンに手をかける。
デルは上着をもう脱いでいた。
しなやかな体が目に入る。肉はあまりついていないスポーツマンのような体だ。

「・・・見られていると着替えづらいんだが。」
ご、ごめん。

自分も上着を脱ぐ。

「相変わらず、女みたいな体だな。」
う、うるさいな。・・・ん？相変わらず？
「いや、何でもない。」
・・・何なんだよ。

「よお、エージェちゃん。」
ライさんが入ってきた。ちゃん付けしないでください。
「何しにきた・・・」
デルから、黒いオーラが漂う。
「いや、デルの着替えを手伝おうと思ってな。」
「近寄るな。キモイ。ウザイ。消えうせろ。」
そ、そこまで言わなくても・・・

「まったく。ベッドの上で俺にすがり付いて可愛く泣いてたのは誰だったんだろうな。」

「な、何でその話が出て来るんだよ！！」
ベッドって・・・。俺はデルを信じていいんだろうか・・・。

「じゃあ、また後でな。」
ライさんが帰る。何しにきたんだろう。

「おい、行くぞ。」
気がつくとデルはもう着替えていた。
ちょっと待って！
急いで着替える。

続く・・・のさ。

？　パーティーが始まるよ（後書き）

次の話は水着が沢山出てくる話になりそうだ・・・。
チェシャが主役で書こうと思います！

読んで下さり、ありがとうございます！！

？　ゲームはもう始まってる（前書き）

エージェ「あれ？チェシャ先輩がどうしてプールサイドに？」

チェシャ「フミィ・・・」

エージェ「え！ハッター先生に無理やり・・・」

チェシャ「ミー！ミミー！」

エージェ「その上、スク水を着せられたなんて・・・」

チェシャ「フミィ・・・」

エージェ「でも、大丈夫ですよ。」

チェシャ「ミー。」

エージェ「似合ってますから。」

チェシャ「フミィ！！」

？　ゲームはもう始まってる

「何でだろう。さっき、チェシャ先輩の言葉が分ってしまっていたような・・・」
俺、エージェは呟いていた。
今、俺はプールサイドにいる。

バシャ！

「うわっ！」
いきなり水が飛んできた。

「ビックリしたやろー。」
プールの中に金髪の人がいた。あ、ダイヤさんだ。
「やめてください！子供じゃないんですから・・・」

どんっ

誰かに背中を押された。

ばっしゃーん！！

「つ、冷た！」
プールの中に落とされたようだ。
「おい、クラブ！何しとんねん！！」

プールサイドには緑の髪をした人、クラブさんが立っていた。
「・・・。」

そして無言で去っていった。

「すまんな。あいつネチネチと嫌がらせするタイプやから・・・」
「いえ、気にしてませんよ。」
笑顔で返す。

「あ、ダイヤ！何しとるとー」
向こうから赤髪の可愛い子が来た。あ、男だ・・・
「お、ハートやん！1年のお前がなんでおるん？」
ハートって、ことはトランプの兵隊か。ちょっと、気まずいな。

「そっちこそ2年の授業に何で3年がおるとよ。」
こっちも、独特な話し方だな。
「わいは暑かったから、プールに来たんや。」
理由になってない・・・
「僕は昨日、２５m泳げんかったけん、今日も来るようにいわれたとー。」
高校生で２５泳げない人って、いるんだな・・・

「それより、そこのめんこい子、誰？」
め、めんこい？
「ほら、この前言ったやんけ、クラブの・・・」
「あ、邪魔した子って、この子と！思ってとよりめんこかねぇー」
ハートさんが俺の頭を撫でる。
「あの、めんこいって・・・」
「あ、可愛いって、こと。」
ダイヤが耳打ちする。
か、可愛いって、俺は男だぞ！

「じゃあ、練習せんといかんけんまたね。」

そう言って、泳いで行った（全然泳げてないけど・・・）

「しっかし、本当に男なん？ちゃんとついとるか？」
「つ、ついてますよ！！」
「せやったら・・・」
ダイヤさんが俺の下半身を触ってきた！
「な、何するんですか！！」
「ええやん。男同士なんやし。」
ニヤニヤと笑うダイヤさん。
「ちょ、そこは・・・」
「あ、童貞なん？」
「う、うるさい！関係ないじゃないですか！！」
「でも、ここがこんなに・・・」
「ど、どこ触ってるんですか！！」

ごすっ！

ダイヤさんの頭に金鎚（かなづち）が命中した。
「エージェから手を離せ！この万年発情期！！」
その先にはデルがいた。

「痛いやんけ！ってかなんで金鎚・・・」
「ちっ！生きてたか。」
「あ、あんさん確か泳げんかったな！そやから、カナヅチとかけて、金鎚を・・・」
「違う！偶然俺の横に金鎚があっただけだ！それに俺は２ｍは泳げる！！」
デル、２ｍは泳いだに入らないと思うよ。
「と、とにかく、エージェから手を離せ！！」
「しゃーないな。」

ダイヤさんが俺から手を離した。
「と、見せかけて、」
いきなり頬を掴まれたと思うと、いきなりキスされた
「どや、驚いたやろ？」
ダイヤさんが俺の顔を覗き込む。
「あ・・・」
ダイヤさんの顔が引きつった。
俺の目には涙が浮かんでいた。
「す、すまん！で、でも初めてじゃないやろ！」
あせるダイヤさん。
「うるさい・・・」
「え、初めてやったん？」
ダイヤさんが俺の頬を触る。
「うるさい！」
俺はその手を振り払った。
なんで、好きでもないやつからキスされなきゃいけないんだ！！
涙が零れ落ちる。
「エージェ・・・」
心配そうに近寄るデル。
上も、下も、何もかも分けが分らなくなった。

つづ

く・・・んだ。

？　ゲームはもう始まってる（後書き）

雲行きが怪しくなってきたな・・・。

ついでに、ダイヤは関西弁。ハートは博多弁です。
間違えがあったら教えて下さい・・・自信がないので。

読んで頂きありがとうございます！リクエストがあったら、お答えします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3076n/

雑談～アリス編～

2010年12月9日13時48分発行